

地域社会における文化的ソーシャルキャピタルの形成

—北海道文教大学共同研究「ENIWA 学」と島松「夢創館」との協働事業
「風と大地の芸術祭 2021」をふまえて—

加藤 裕明・西野 美穂・笠見 康大・吉岡 亜希子・小山田 健

要旨:本研究では、地域社会における公共的文化施設と大学との連携による文化・芸術活動を実践し、北海道恵庭市島松「夢創館」の役割とりわけ、人（館長鶴田をはじめとするスタッフ）が人（利用者）を支援するプロセスとその意味を明らかにするよう分析し記述を行った。その結果以下三点が明らかになった。第一、鶴田の日常的な支援を支えるものには、少年時代に劇場でみた舞台芸術への憧憬がある。それが専門的な舞台技術を学ぼうとする姿勢を生んでいる。第二、鶴田の支援を生み出す動機やエネルギーは、他人から頼まれたら断れないという義侠心にある。それが一般利用者に対する支援における献身性を生み出している。第三、ホールの利用者に対する鶴田の日常的な支援には、安心して活動できるような配慮と寛容性がある。本研究では、それらが夢創館のスタッフの間でも共有され、公共的文化施設における「文化的ソーシャルキャピタル」につながっていることを明らかにした。

キーワード: ENIWA 学、^{むそうかん}夢創館、文化的ソーシャルキャピタル

1. はじめに：本研究の目的

本研究の目的は、地域社会における公共的文化施設と大学との連携による文化芸術活動を実践しながら、公共的文化施設の役割とりわけ、人（スタッフ）が人（利用者）を支援するプロセスを明らかにすることである。

近年、過疎化の進む地域において、コミュニティの形成に関する議論、とりわけ人と人をつなぐ議論が活発である（例えば広井 2009）。そのような中で、文化・芸術の役割が注目される。特に新潟県妻有^{つまり}において 2000 年から始まった「大地の芸術祭」は、2022 年において第 8 回を、また 2010 年から始まった瀬戸内国際芸術祭、愛知トリエンナーレは第 5 回を数えた。これらの芸術祭はいずれも国内外で高い評価を得たトップアーティストの作品が多数出品され、予算規模も莫大である¹⁾。社会的関心も年々高まっている。その他、大都市から離れた地方小規模自治体において、芸術を用いた地域づくり（アートプロジェクト）が盛んである²⁾。

一口に地域における文化・芸術の役割と言っても、その役割として議論される場所は、地域創生に向けた観光創出、産業振興、はては SDGs に至るまで総花的である（増淵 2018）。本稿では、それら多岐にわたる役割の基礎にあるソーシャルキャピタルに焦点をあてる。一般的に、ソーシャルキャピタル（以下、SC）とは、「相互利益のための調整と協力を容易にする、ネットワーク、規範、社会的信頼のような社会的組織の特徴を表す概念」（パットナム、坂本・山内訳 2004：58）と定義される。本稿では、この概念をふまえ、地域の公共的文化施設の支援に焦点をあてる。そして、「人間相互の協力や信頼を育む文化施設による支援」として、それを新たに「文化的ソーシャルキャピタル」（以下、文化的 SC）と名づけ、その日常的な支援はどのようにして形成されるのか、北海道恵庭市島松の公

共的文化施設「夢創館」、特に鶴田^{つとむ}力をはじめとするスタッフによる文化・芸術活動の支援に焦点をあて、明らかにすることを目的とする。

2. 文化・芸術とソーシャルキャピタルに関する先行研究

越後妻有「大地の芸術祭」を調査した松本・市田ら（2005）は、芸術祭を契機に、SCの形成がどのように行われたのかに注目し、芸術祭の効果を検証した。この研究では、芸術祭の進行に中心的な役割を担った集落の区長8名に対し、インタビューを実施した。その内容をテキスト化し分析を行った。その結果、「大地の芸術祭」の活動によって複数の集落で、「若者との交流」「アーティストとの交流の継続」等が見られたとする。また、勝村（松本）・田中ら（2008）の質問紙調査によれば、「大地の芸術祭」による「地域における好ましい変化の有無」について、「あった」が28.3%に対し、「なかった」47.2%、「無回答」は24.5%であった。一方で、芸術祭によって「地域内の話題が増えた」（41.9%）、「地域の行事が増えた」（26.2%）、「地域の活気が増えた」（25.5%）、「寄り合いの回数が増えた」（25.2%）といったように、人と人とのつながりが生まれたことがわかる回答も一定程度あることがわかった。

また「大地の芸術祭」に関し2006年と2012年にアンケート調査を行った澤村は、「つきあい・交流・社会参加、信頼、互酬性の規範、地域のまとまり、地域への愛着」をSCを構成するものとし、イベントやアーティスト等への協力というかたちで、芸術祭の運営に協力した住民ほど、高い水準のSCを享受しているとする（澤村2014：77-78）。

さらに東京芸術大学と取手市との協働による「取手アートプロジェクト2006」に関し、アンケート調査を行った本田によれば、SCの概念を用いてはいないものの、「コミュニティのつながりの強化」、「地域と芸術家との交流の深まり」といった項目について、「すでに効果があり」とする評価が10%を超えているとする（本田2016：39-42）。

以上の先行研究からは、アートプロジェクトによって、地域に一定程度のSCが生まれたことが示唆されている。

3. 夢創館誕生の背景と運営

以上の先行研究をふまえ、筆者らENIWA学のメンバーは、2021年10月15日（金）から17日（日）にかけ、夢創館において、「風と大地の芸術祭2021」（以下「風と大地」）を開催した。恵庭市内の舞台用ホールは、夢創館以外に、市民会館大ホール、中ホール、島松公民館（集会室）がある。全国的課題であるが、公共的ホールは利用者数をどう高めるかが課題である（表1）。この点、夢創館は、小規模であるがゆえに料金も安く、一般の愛好者が利用しやすい。だが、文化的SCのためには建物（ハコモノ）があればいいわけではない。地域が持つ「人・事・場・物」（札幌市立大学地域創生デザイン研究チーム2020：204-205）を一体的に考えていく必要がある。

夢創館は、1937（昭和12）年、島松商業組合が醤油や酒などの商品保管倉庫として建造した軟石造りの建物である。戦後は、恵庭町農業協同組合が米の貯蔵倉庫として1992年まで使用していた。が、その後は特に活用されず、1998年市民が自由に集い交流できる施設がほしいという声が高まり、恵庭文化村協議会が発足した。そして、1999年倉庫を改修し、市民が展示や舞台活動に親しむ場として生まれかわった。「軟石造りの歴史ある建物と、市民の文化に対する熱い想いが織り成し出来あがった施設」（以上、恵庭市ホームページ）である。石造りであるため音の響きがよく、また照明に

よって壁の軟石が陰影をともなって浮かびあがる。ある利用者は「小さなふるえ」を常時起こしているような場である」と語った〔20211013 記録〕。2016年4月、それまで任意団体として活動していた「島松夢創館倶楽部」がNPO法人

となり、市の指定管理者となり運営する。

入るとすぐにフリースペースがあり、奥にカフェ³⁾、そして右手全体がホールとなる。ホールの運営を担う中心が館長の鶴田^{つとむ}力である。後述するが、鶴田が日常的に担うのは、単なる貸館事務ではなく、専門的な知識と技術を必要とする照明操作を含めた舞台回しである。利用者は、ほぼホール利用料のみで文化・芸術の発表が可能となる。

4. 北海道文教大学 ENIWA 学⁴⁾ 主催「風と大地の芸術祭 2021」の開催

「風と大地」のプログラムは、〔表2〕に示すとおりである。コロナ禍、開催自体が危ぶまれたが、メンバーは、鶴田らの支援⁵⁾により開催に踏み切ることができた。以下、表に従い各演目の内容を概説する。

10月15日(金)の「ベンガラ染めアート」は、北海道文教大学に隣接する国指定史跡カリンバ遺跡⁶⁾の特徴であるベンガラ朱を、幅1m×長さ10mの白布に染めたものである。恵庭の幼児、小学生及び大学生が7月のワークショップによって完成させた。「ベンガラ朱」とは、赤色顔料のことで、合葬墓内部一面に撒布されていた。現在でも土中から採取できる。恵庭に生きた縄文人の美的感覚を、現代人も追体験できる「モノ」である。ワークショップでは、ベン

ガラ朱を現代に生きる私たちそれぞれの自分事とできるよう、「コト」(事=ワークショップ)と「バ」(場)を介して「ヒト」を交流させ、地域の将来の活力につなげることをねらいとした(笠見・加藤・西野・吉岡・小山田2021)。

翌16日(土)の朗読劇「銀河鉄道とカリンバの夜のために」は、カリンバ遺跡に埋葬された女性シャーマン(祈祷師)が、宮沢賢治の描いた「銀河鉄道」に登場し、ジョバンニやカンパネラと語り合う

〔表1〕 恵庭市内ホール1日の収容人数及び平均利用者数(カッコ内は収容人数に対する割合。小数点以下第2位を四捨五入)

恵庭市内ホールの収容人数及び利用者数	収容人数	2019年度利用者数	2020年度利用者数	2021年度利用者数
市民会館大ホール	898	121.2(13.5%)	33.4(3.7%)	46.9(5.2%)
同 中ホール	500	152.7(31.0%)	46.4(9.3%)	42.3(8.5%)
島松公民館(集会室)	400	78.8(20.7%)	21.4(5.4%)	29.4(7.4%)
夢創館ホール	160	32.7(20.4%)	15.7(9.8%)	15.6(9.8%)

恵庭市教育委員会教育部社会教育課編「令和3年度 恵庭市社会教育施設利用状況」より加藤作成。収容人数：市民会館については「恵庭市市民会館HP」より、島松公民館については恵庭市社会教育課、夢創館については館長鶴田への聴き取り調査による。

〔表2〕「風と大地の芸術祭 2021」プログラム

10月15日(金)	10月16日(土)	10月17日(日)
展示作品	舞台作品1	舞台作品2
照明合わせ、舞台セッティング	照明合わせ、舞台セッティング及び学生のためのリハーサル	<ul style="list-style-type: none"> 10:00～11:00 アイヌ民族の口承文芸及び舞踊とワークショップ(参加体験型学びの場)
		<ul style="list-style-type: none"> 11:30～12:30 (*北海道文教大学「ENIWA学」+市民協働プログラム:朗読劇「漁川物語」)
<ul style="list-style-type: none"> 16:00～18:00 ベンガラ染めアート展示	<ul style="list-style-type: none"> 14:30～15:30 朗読劇「銀河鉄道とカリンバの夜のために」 	<ul style="list-style-type: none"> 14:00～14:20 ミニ講演「中山久蔵と現代」(加藤裕明)
	<ul style="list-style-type: none"> 16:00～17:30 日本の話芸:上方落語(林家卯三郎) 	<ul style="list-style-type: none"> 14:30～16:00 チーム絆花ミュージカル「中山久蔵翁物語」

全て入場無料。コロナ対応のため、入場整理券配布、各回とも出演者・観客含め50名 完全入れ替え制

という趣向の物語である。北海道文教大学の学生の朗読、教員（西野美穂）のピアノ演奏による上演である。

「日本の話芸」について、ENIWA 学は地域の文化・芸術を掘り起こすことを目的としながら、なぜ上方落語なのかと問われるかもしれない。だが縄文時代は海を越えた交流の活発な時代であった。日本海、太平洋どちらの海にも近く、しかも大小の河川が多い恵庭もまたそうであったと推定される。⁷⁾ 「風と大地」の「風」は、他者、他地域からの訪問者を意味している。その趣旨から招いた。

最終日の「アイヌ民族の口承文芸及び舞踊によるワークショップ」は、アイヌ民族文化財団に申請し、アイヌ古式舞踊団「アンコラチメノコアイヌ」⁸⁾ に無料で公演してもらった。コロナ禍の為、観客といっしょに歌い、踊ることは出来なかったが、メンバーはウポポ（歌）とリムセ（踊り）を観客に披露した。

午後、北海道における寒冷地米の成功・普及の第一人者中山久蔵（1828-1919）の人生を舞台化した『中山久蔵翁物語』⁹⁾ を恵庭市の小中高生が上演した。上演前、加藤が久蔵の寒冷地米普及にささげた活動の意味を、コモンズ¹⁰⁾ の観点から紹介する 20 分程度の講演を行った。

以上を通じて「風と大地」の参加者は、鶴田を中心とする夢創館スタッフの手厚い支援を受けた。具体的には、開催時期のアドバイス、大道具、吊りもの用バトン、照明機材等々の基本的な説明及び使用法、そして演目をデザインした会場前の看板掲示、さらには配布用質問紙調査（後述）の内容精査といったものである。

5. 研究の方法および記述の公共的一般性

筆者らは、「風と大地」の観劇者に対し質問紙調査を実施した。質問紙は入場時に渡し、退場時に回収した。コロナ禍、入場者数を舞台関係者も含め 50 名に絞り実施したため、回収できた質問紙は 3 日間で 75 通であった。先行研究（勝村〈松本〉・田中ら 2008）をふまえ、質問項目の中に、『風と大地』のようなイベントは、「地域における好ましい変化を生むと感じますか」、および、「上の質問に①（とても感じる）、②（まあまあ感じる）と答えられた方への質問です。その『地域における好ましい変化』とは、特にどのようなものでしょうか。右からひとつお選びください。①地域の歴史や文化への愛着の高まり、②夢創館のような施設への関心の高まり、③人と人とのつながり（コミュニティ）が生まれること、④地域全体の活性化、⑤その他（自由記述）」という 2 問を含めた。その結果は表 3 のようであった。なお、パーセンテージの合計が 100%にならないのは、小数点以下 2 桁を四捨五入したためである。

表 3 地域の歴史や文化をテーマとしたイベントと、地域における好ましい変化：芸術祭参加者への質問紙調査結果

「好ましい変化」を生むと感じるか	件数	割合	「好ましい変化」の具体例	件数	割合
とても	36	48.0%	地域文化・歴史への愛着	23	30.7%
まあまあ	31	41.3%	夢創館のような施設への関心の高まり	6	8.0%
あまりない	4	5.3%	人と人とのつながり（コミュニティ）が生まれること	9	12.0%
ほとんどない	0	0%	地域全体の活性化	7	9.3%
無回答	4	5.3%	その他・無回答	30	40.0%
計	75	99.9%	計	75	100.0%

また、芸術祭終了後の11月中旬から12月にかけて、夢創館のある島松仲町1丁目及び2、3丁目、隣接する島松本町1、2丁目の地域住民に対し、質問紙調査を行い¹¹⁾、**表3**と同じ質問を含めた。配布は島松仲町の町内会役員でもある鶴田の協力を得、島松町内会を通じ、全戸配布し、夢創館のポストに投函してもらう形で回収した。全807世帯に配布し、回収は77通、回収率は9.5%であった。その結果を**表4**に示す。上記の二つの調査では、芸術祭参加者の場合、「好ましい変化」を生むと感じるという回答が「とても」と「まあまあ」をあわせて89.3%に上るのに対し、夢創館のある地域住民の場合は63.7%にとどまり、「あまり感じない」は22.1%であった。また、「好ましい変化」の具体例として、芸術祭参加者の場合、「地域文化・歴史への愛着」が30.7%であったのに対し、地域住民の方は15.6%であった。一方で、「人と人とのつながり（コミュニティ）が生まれること」と答えた人の割合は、芸術祭参加者より多く18.2%であった。

表4 地域の歴史や文化をテーマとしたイベントと、地域における好ましい変化：夢創館の立地地区世帯への質問紙調査結果

「好ましい変化」を生むと感じるか	回答数	割合	「好ましい変化」の具体例	回答数	割合
とても	13	16.9%	地域文化・歴史への愛着	12	15.6%
まあまあ	36	46.8%	夢創館のような施設への関心の高まり	11	14.3%
あまりない	17	22.1%	人と人とのつながり（コミュニティ）が生まれること	14	18.2%
ほとんどない	4	5.2%	地域全体の活性化	9	11.7%
無回答	7	9.1%	その他・無回答	31	40.3%
計	77	100.1%	計	77	100.1%

さきの先行研究の示唆する文化・芸術祭とSCとの間の相関性は、筆者らの調査結果とも符合する。

しかし、先行研究が、莫大な予算をかけ、トップアーティストによる作品を集めた芸術祭やアートプロジェクトを対象としているのに対し、本研究は、日常的な公共的文化施設の一般市民に対する支援活動を対象とする。特に、夢創館館長の鶴田は、施設利用者を普段どのように支援しているのだろうか。その日常性において、支援の意味を問うことが本研究の特徴である。また、先行研究の研究者が、外部の研究者として研究にのみ従事する立場であるのに対し、筆者らは、研究者であると同時に、「風と大地」を開催した実践者でもある。地域の公共的文化施設においてイベントを開催し、実際に支援を受ける当事者として、その支援のあり方を明らかにする。したがって本研究は、研究者が一般の利用者として実践するアクションリサーチ¹²⁾の方法をとる点でも、先行研究とは異なる視点を提供する。特に、先行研究の記述には希薄であった、一般の施設利用者に対し、施設運営者がどのように支援するのか、人と人との「接面」¹³⁾に着目し、明らかにする。

近年、人間科学のエヴィデンス（根拠、明証性）に関する議論が注目される。自然科学においてはある限定された条件下における実験、観察及びそれらの結果を数学的に処理したものがエヴィデンスとされてきた。しかし、社会学、教育学、看護学など、人と人との関係に関する問いと実践を対象とする人間科学においては、自然科学のような限定条件下で得られた数値を集めても、多様で複雑な環境下における人間の経験を明らかにすることは難しい（小林・西ら2015：i - ii）。本稿で対象とする鶴田の支援を記述するにあたって、利用者とのあいだに生じる経験の意味が、「他の複数の人々にも『なるほど』と納得できる、共通理解」（山竹2015：79）が必要である。その共通理解が、人間科学のためのエヴィデンスを構成する。主観的な経験の意味を扱うためのエヴィデンスについて、西

(2015:124) は、「自分の体験を反省してみると『確かにこうなっている・そうとしかいえない』ということ」、その「確実性ないし不可疑性のこと」を「(体験) 反省的エヴィデンス」と呼ぶ。これらをふまえるとき、人間科学に関する記述の一般性は、普遍的な一般性というよりも公共的一般性(鯨岡 2005:41) と呼ぶ方がふさわしい。本稿における記述の一般性もこの公共的一般性を指す。

そこで、夢創館倶楽部の日常的な支援のあり方について、鶴田に対する半構造化インタビュー¹⁴⁾ で得られた記録をもとに、筆者(加藤)との間の「接面」に焦点をあてながら、その支援のあり方と文化的 SC との関係性を明らかにしていく。

本研究にあたっては、先述の質問紙調査をふくめ、2021年11月3日、北海道文教大学研究倫理審査委員会に申請し、承認を得ている(承認番号 03014)。

加藤は、「風と大地」の計画段階から実施に至る中で、鶴田とは日常的に協議を重ねてきた。その中で、鶴田自身の半生もしばしば語られた。筆者にとってはそのどれもが興味深いものであった。鶴田には論文にまとめるにあたり、あらためて氏名を記述することの了解を得た。また、鶴田以外のスタッフの語りについては仮名表記の上で引用することの許可を得た。その上で、筆者は鶴田の語りを B5 版ノートや手帳に記録してきた。その記録もふまえ、本稿執筆にあたり、あらためて鶴田に対し 3 日間¹⁵⁾ にわたる半構造化インタビューを行った。それは、鶴田の支援が地域の文化的 SC を育むプロセスについて、「確かにそうだ」と腑に落ちるまで繰り返し、加藤との間で「共通理解」を得る過程であった。その内容を B5 版大学ノートに記録し、またボイスレコーダーで録音し、その内容を確認しながら本文を記述した。その記述を、鶴田と夢創館スタッフに確認してもらい、記述の正確性を期した。さらに、共著者である西野・笠見・吉岡・小山田によるメンバーチェック¹⁶⁾ にかけて、一般の読者との間においても「共通理解」が得られることを目指して本文を記述した。なお、インタビュー内の鶴田の言葉を引用した後は、例えば〔20221222〕とその日付を付す。また、鶴田以外のスタッフの言葉は日付のあとに話者の記号を、加藤による活動記録を引用する場合には「記録」と付す。さらに、発話のニュアンスを伝えるために加藤が補った言葉は〔 〕で示す。

6. 鶴田力における支援のあり方

6.1 鶴田力の来歴

鶴田力は、1940(昭和15)年、北海道夕張町紅葉山^{もみじやま}に生れた。10人兄妹の末っ子であるため「好きにさせてもらった」と鶴田は笑う。2022年12月現在82歳である。高校卒業後、1959年、紅葉山郵便局に入職した。そこで11年間、業務全般(郵便、保険、電信・電話、庶務、財務等)を経験し、「なんでもできるつぶしのきく人間になった」〔20221222〕。その間、「このままでは自分がだめになってしまうのではないか」〔20221227〕との思いから、通信教育で法政大学の法学部に入学した。が、スクーリングが大変だったためやむなく中退した。当時、北海道から東京まで行くとなれば一日がかりであることを考えれば無理もない。ただその興味関心のエネルギーはやむことはなかった。依頼され町内会に入り、23歳で青年団長を務めた。若くして地域貢献への期待を感じた頃である。

その後、異動を重ね、若干39歳で峰延^{みねのぶ}の局長になる。その後、空知^{そらち}等の郵便局長を歴任した。仕事は忙しく、帰宅は「毎日夜9時から10時が当たり前の生活だった」。その後、1993年、島松郵便局長として赴任した。60歳で石狩管内特定郵便局連絡協議会の会長になり、65歳で定年退職を迎えた。

鶴田は長く管理職を務めたことを振り返り、「みんな〔部下が〕本当によく動いてくれた」と繰り返す。

返し語った。その思いは夢創館カフェのスタッフに対しても共通する。「最低賃金で働いてもらっている以上、スタッフが働きやすいように働いてもらわなければならぬ」から、細かいことは「すべてスタッフに任せている」という〔20211215,20221222〕。カフェの女性スタッフAに確認すると、即座に「その通りですね。お子さんのいるスタッフもいるので、シフトを自分たちに任せてくれて自由にできる働き方はとてもありがたい」〔20230104A〕と答えた。これらのやりとりから筆者は鶴田の寛容性を感じたが、それは、「風と大地」の際に受けた支援に感じたものと同質のものであった。

退職後は「何もしたくない」と思っていた鶴田だが、地域のFMラジオ局の立ち上げに際し、商工会議所から「〔財務を〕手伝ってくれ」と懇願され、「しぶしぶ引き受けた」。ところが赤字経営であったところに出火も重なり、これを機に閉局させようと思った。が、「やっぱり続けよう」〔20221222〕となり、現在に至ったという¹⁷⁾。筆者は、ラジオ局を維持しようと思ったきっかけが気になり、次のインタビューで再度質問した。

加藤：厳しい財政状況の中で、閉局しようと思ったのに、「やっぱり続けよう」と思ったきっかけ、動機はなんだったんでしょうか？

鶴田：うーん〔と、一瞬遠い目をしたが、きっぱりと〕、それはやっぱり、放送文化を守ろうということでしょうね。放送に対する皆さんの熱意にうたれたといいますか。

加藤：普通なら、もうやめようってなりますよね。

鶴田：そうです。そっちの声の方が多かったです。ただ半年放送を止めてしまうと、もう開局できませんからね。

加藤：鶴田さんご自身はどうお思いだったんですか。

鶴田：いやー困ったなあと思いましたよ。〔意見が〕割れましたからね。それでまあ…いますぐ決断をくださんでもいいんでないか…と言いながら…〔先延ばし 笑〕。〔20221227〕

筆者は、鶴田がラジオ局を維持しようとした思いと、夢創館を維持し続けるそれとが重なった。「風と大地」の実践を通じて、筆者らは、鶴田による照明機材の使用に対する様々な配慮、便宜を受けた。そこに彼の芸術文化に対する理解と一般的利用者に対する献身性を感じるとともに、その動機やエネルギーはいったいどこから来るのかという思いが常にあった。そのことを問うと、夢創館との関りも、基本はFM局の立ち上げと「同じ」と答えた。つまり他人から頼まれたら断れないという義侠心である。しかし、夢創館のような文化・芸術ホールを運営していくためには、「頼まれたら断れないという思い」だけでは難しいだろう。なぜなら、鶴田の支援は単なる貸館事務ではないからである。

夢創館の理念について鶴田は、「第一に文化発祥の基地として、第二に高齢者の憩いの場として、第三に一般の人を含めた交流の場として運営していくこと」を理念としてきたという〔20221222〕。だが、演劇や音楽など「文化発祥」のためには専門のスタッフが必要である。自治体や企業の運営する文化ホールでは、公演ごとに専門の照明・音響等のスタッフを雇用する。しかしそれは一般の利用者には不可能である。そこで鶴田は、一般の利用者に対して、照明等の知識と技術の基本をわかりやすくアドバイスする。利用者は、ほぼホール利用料のみで文化・芸術の発表が可能となる。その支援の根底にあるものは何だろうか。

6.2 舞台への関心

鶴田が生まれ育った夕張では、鶴田が3歳の昭和18(1943)年、市制が誕生した。最盛期人口12万人を数えた北海道を代表する一大産炭地である。鶴田が生まれた紅葉山にも、劇場があった。小学生の頃から劇場に通ったという鶴田にとって、今でも記憶に残る舞台は、盲目の津軽三味線奏者白河軍八郎の演奏だったという。

鶴田：考えてみれば、子どもの頃から家の近くに劇場があったんですね。紅葉山にあったんです。そこによく見に行っていました。もともと、自分で、本能的に好きなんでしょうね。好きだから〔夢創館でも〕できるんですよ。〔中略〕戦後ですからね、楽団だとか、踊りだとか、よく来ましたね。テレビもなんもない時代ですからね。

加藤：紅葉山の劇場で、一番記憶に残っているのはどの演目でしょうか。

鶴田：やっぱり白河軍八郎ですね。こう、〔軍八郎が〕手を引かれて、舞台に座って…〔自分は〕子どもですからね、こうやって〔じっと目を凝らすようにして〕見てるわけですよ、あのじい、なにやれるのかなって思いますよ、そりゃ、こっちからしたら〔笑〕。ところが三味線弾かせたら、もう度肝を抜かれるわけですよ。ビビビビピンと鳴ったら痺れてきますからね。そういう記憶、ありますね。そういうのが好きなもんだから、この間も〔夢創館で〕クラシック聴いていると、ああ、これこうだとか、合ってねえなあ、伴奏、とかわかるわけですよ。〔20221222〕

現在、利用者の舞台回しまで支援する鶴田の背景には、少年時代、ふるさとでみた舞台芸術への憧憬がある。しかしただ「好き」なだけでは技術が伴わない。そこで鶴田は、コロナ禍前、札幌市民会館（現カナモトホール）で開催された3日間にわたる舞台技術講習会にカフェスタッフのBとともに参加した。全道から舞台事業者が約30人集まった。「恥ずかしいけど若い人ばかりですよ。80近いじいが行っていいのかなって…」と自嘲気味に笑いながらも、「〔学ばないと〕自分で〔利用者〕に説得するときに自信を持って言えませんからね。こうしたらこうなりますよとか。」と言った。夢創館に専門の照明技術者はいないが、この研修を通して鶴田とBは、基本的な照明合わせの支援ができるようになっていった。例えば、「ピアノの演奏者の表情を浮かび上がらせる照明」ひとつだけでも雰囲気が変わることを、一般の利用者は知らないと言った鶴田は言う。「明るいまま〔客電をつけたまま〕でいいです」という利用者に、「こうやるといいですよ」とアドバイスすると、だんだんわかってくるのだという〔20230104〕。そのような支援のあり方は、貸館事務のみの管理者には不可能な話である。実際筆者は、ある別のホールで、ピアノ演奏の際、照明機材があっても演奏者にはあてず、スポットがずれたままで演じさせているのを何度も目にした。それに対し、基本的な照明技術をアドバイスする鶴田の根底には、夕張時代の舞台鑑賞経験に加え、一般利用者に対して、「少しでもいいイベントにしてもらいたいという思いが強く」あるのだとBは語った〔20230104B〕。

「風と大地」の準備過程で筆者も言われたことだが、施設利用料を支払うためにチケットが売れるかどうか心配する利用者に対して、「大丈夫。とにかくまずやってみなさい。」と声をかける〔20211215, 20221227〕。「採算」はひとまず脇におき、とにかくホールを利用してもらうための支援を行うというスタンスである。

あらためて筆者は鶴田に、「〔文化的SCとしての〕人と人をつなげることについて、特に実感さ

れていることはどんなことでしょうか」という質問をした。

鶴田：うーん…なんなんでしょうかね…知らない者同士がひとつのものに夢中になれるっていうことでしょうかね…それによって分かち合えるっていいですか、いいもんだとか、わるいもんだとかっていう、だからそれによって同じ価値観を持つことができるっていう、うれしさもあるでしょうし…楽しみもあるでしょうし…全然知らない人たちが知り合える一番もとになるものでないですかね。

加藤：「同じ価値観」って大事だと思われませんか？

鶴田：そうですね。私はそう思いますね。

加藤：どういう点で大事だと思われませんか。

鶴田：うーん…お互いに分かち合えるってことなのかな、人間同士が。それによって自分自身も自信を持てるんじゃないですかね。人間として、いいものはいい、わるいものはわるいって判断して…。だって徹底的にたたかれちゃうと、人間で滅入っちゃうでしょ、でも何だか共通するものがあると、同調し合っ立ち向かえるっていう感じになるっていうかね。

加藤：現代は「価値観の多様化」が「自然」だみたいな風潮もあると思いますが、

鶴田：私はね、それは今の判断であって、長い目で見たときには、そんなに変わらなくて思うんです。人間ていうのは、そのときそのとき時代の中で、お互いどう協調し合いながら生きるのかってということなんだろうと私は思いますね…。〔中略〕

加藤：鶴田さんにとって「コミュニティ」という言葉が意味するものはなんでしょうかね。

鶴田：…結果的には、「心と心とのふれあい」なんじゃないですかね。

加藤：それは具体的にはどういう場面が想像されますか。

鶴田：うーん、なかなかないね、でも。そういわれてみれば〔笑〕。でも、やっぱりお互い困ったときの助け合いだとか、あるいは、うれしいときの喜び合いだとかがつながっていくんじゃないですかね。〔20221227〕

鶴田にとって、「人と人をつなげる」ということは、他者と「同じ価値観」を持つということ、そして「〔長い目で見たときに〕お互いどう協調し合いながら生きるのか」につながるものであった。「価値観の多様化」言説とは全く異なる視点である。舞台をみて、「いいものはいい、わるいものはわるい」と判断し、分かち合い、「全然知らない人たちが知り合える」一番のものを生み出すのが文化芸術及びその「発祥基地」としての劇場である。そのような思いが、鶴田には明確にある。

7. 総合考察：夢創館スタッフの支援とソーシャルキャピタル

以上、地域における文化的 SC が、どのようにして形成されるのか、先行研究にはないアクションリサーチを用い、また一般利用者の日常的な視点、さらには支援する者（スタッフ）と支援を受ける者（利用者）の「接面」に着目しながらそのプロセスを記述してきた。それらの記述を分析し、考察した結果を以下三点にまとめる。

第一、鶴田の日常的な一般利用者に対する支援の根底には、少年時代の原風景としての舞台芸術への憧憬がある。それが芸術文化に対する愛と理解を生み、舞台設営や照明操作など、専門的な知識と技術を吸収しようとする貪欲な学びへの姿勢につながっている。

第二、鶴田の支援を生み出す動機やエネルギーは、他人から頼まれたら断れないという義侠心にあ

る。それが支援における献身性を生み出す。その背景には、「コミュニティ」に対する鶴田の理解、すなわち「心と心のふれあい」が、「お互い困ったときの助け合い」や「うれしいときの喜び合い」としての「同じ価値観」を生む、という認識がある。

第三、鶴田の支援には、カフェでのスタッフに対するそれと共通するものがある。つまり、働くスタッフも一般の利用者も、安心して活動できるような配慮である。そこには「大丈夫. とにかくまずやってみなさい。」という言葉に象徴されるような、寛容性がともなっている。これらの鶴田の支援が他のスタッフにも共有され、地域における文化的 SC すなわち「人間相互の協力や信頼を育む文化施設による支援」につながっている。

以上、地域社会において人が人を支援する、その「接面」における経験の意味について記述してきた。今後も、さらに多くの読者との「共通理解」が得られるよう、探究を進めていきたい。

注

- 1) 例えば、「大地の芸術祭」は2009年、2012年会期中の作品数が360超、市町村の負担金を含む「事業収入」はそれぞれ5億8千110万円、4億8900万円（澤村2014：159）である。
- 2) なかでも大学と地域との連携によるアートプロジェクトが注目される。例えば本文で紹介した「取手アートプロジェクト」以外に、2020年兵庫県豊岡市を舞台にはじまった「豊岡演劇祭」のフェスティバルディレクターを務める平田オリザは「5年でアジア最大級、10年で世界有数の演劇祭を目指す」と語っている（豊岡演劇祭実行委員会編2022：2）。
- 3) カフェは10時から17時半まで女性スタッフ6名によって運営されており、切れ目なくシフトが組まれている。〔20221222〕。
- 4) 「ENIEA学」のこれまでの具体的な実践と研究については、加藤・吉岡・笠見・鈴木（2020）、笠見・加藤・西野・吉岡・小山田2021）に詳述した。参照されたい。
- 5) 鶴田は、緊急事態宣言解除の見通しについて、10月に衆議院選挙が控えていることから、おそらく10月には解除になるのではないかとといった状況分析や、また11月に入ると急速に冷え込む日があることから、開催時期は10月中にした方がよいことなど、事細かな情報提供を行ってくれた。
- 6) 「カリンバ」とはアイヌ語の「桜の木の皮」を意味する。遺跡名は付近のカリンバ川から命名された。カリンバ遺跡の特徴は、縄文中期（約3000年前）の遺構から、複数の被埋葬者が同じ墓に埋葬されていること（合葬墓）、また被埋葬者が身に付けた色鮮やかな漆塗り櫛は、全国の4分の1が恵庭に集中していることである（小林2008：26-27）。
- 7) 漆塗り櫛の出土地が恵庭に集中しており、「本州へ流通した可能性」（上屋・木村：121）があること、また原料の漆液は、ウルシ林が多数存在する必要があるが、恵庭を含め、ウルシ林は、北海道には極めて例外的にしか存在しないため、漆は他地域から持ち込まれたと考えられる。縄文時代、恵庭（カリンバ遺跡）は交流・交易の活発な土地であったと考える理由である。
- 8) 代表の貝澤竹子によれば「ありのままのわたしたち」という意味である。
- 9) 中山久蔵は明治初年、島松に居住し、寒冷地米の栽培・普及に努めた人物である。恵庭市の小中高生で構成するチーム絆花^{はんか}は、コロナ禍を除き、毎年3月中旬、恵庭市市民会館で上演している。
- 10) コモンズとは「自然環境をそれぞれの置かれた社会的、経済的、法制的な諸条件のもとで、持

続可能 (sustainable) なかたちで管理, 維持するための制度, 組織」(宇沢・茂木編 1994: 4) と定義される.

- 11) 調査に当たっては, 北海道文教大学研究倫理審査委員会に申請し 2021 年 11 月 3 日に承認を得た. (承認番号 03014)
- 12) アクションリサーチとは, 実践の計画・実行・観察・省察という四つのサイクルを循環させ, 実践と研究を相互に改善していく研究手法である (シュワント 2019: 2).
- 13) 鯨岡は, 人と人とのあいだに生まれる独特の空間や雰囲気を「接面」と名付けた. 教師と生徒, 臨床家と患者といった人間と人間との間に生まれる「接面」は, 「人が人をわかるという出来事が生まれてくる基盤」をなす (鯨岡 2015: 195). 公共的文化施設の運営者は, 利用者に対しどのように支援しているのかを考察する本稿においても, この「接面」に着目する.
- 14) 半構造化インタビューとは, インタビュワーがあらかじめ計画していた質問項目を主軸としながらも, インタビュイー (取材対象者) の応答によっては, 予定項目を適宜修正し, あるいはあらたに質問を加え, 研究課題の本質により鋭く迫っていく方法である.
- 15) 2022 年 12 月 22 日の 13 時 10 分から 15 時 15 分, 12 月 27 日の 13 時半から 14 時 45 分, 2023 年 1 月 4 日の 16 時 10 分から 17 時 40 分の 3 回である.
- 16) メンバーチェックとは, 実践を共にしていた自分以外の実践者に, 分析結果を確認, 検証してもらう作業をさす (デンジン, リンカン編 2006b: 58).
- 17) 現在, FM e-niwa と名前を変え, 恵庭の FM 局として定着した. 鶴田は現在, 「ボランティア」として FM e-niwa の理事をも務める.

文献

- デンジン N.K., リンカン Y.S. 編 (平山満義監訳, 藤原顕編訳) 『質的研究ハンドブック 2 巻: 質的研究の設計と戦略』北大路書房, 2006.
- 恵庭市ホームページ (city.eniwa.hokkaido.jp 2022 年 12 月 12 日取得)
- 藤野一夫+文化・芸術を活かしたまちづくり研究会, 2020, 『基礎自治体の文化政策』水曜社.
- 広井良典, 2009, 『コミュニティを問い直す一つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房.
- 本田洋一, 2016, 『アートの力と地域イノベーション 芸術系大学と市民の創造的協働』水曜社.
- 笠見康大・加藤裕明・西野美穂・吉岡亜希子・小山田健, 2021, 「地域資源を活かしたアート系ワークショップの創出—共同研究『ENIWA 学』におけるカリンバ遺跡を題材にしたベンガラ染め体験を事例に一」『北海道文教大学論集』第 23 号, 49-61 頁.
- 加藤裕明・吉岡亜希子・笠見康大・鈴木敏正, 2020, 「地域社会参画型教育における大学教員の支援—大学教育改革プロジェクト「ENIWA 学」における朗読劇『漁川物語』上演を事例として—」『北海道文教大学論集』第 22 号, 1-13 頁.
- 勝村 (松本) 文子, 田中鮎夢, 吉川郷主, 西前出, 水野啓, 小林慎太郎, 2008, 「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因—大地の芸術祭 妻有トリエンナーレを事例として—」『文化経済学』第 6 巻第 1 号, 65-77 頁.
- 小林隆児・西研編著, 竹田青嗣・山竹伸二・鯨岡峻, 2015, 『人間科学におけるエヴィデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ』新曜社.

- 小林幸雄 (2008) 「縄文文化の透かし模様入り漆櫛とその技術」『北海道開拓記念館研究紀要』第 36 号, pp. 1-36 頁.
- 鯨岡峻, 2005, 『エピソード記述入門』東京大学出版会.
- 増渕敏之, 2018, 『ローカルコンテンツと地域再生 観光創出から産業振興へ』水曜社.
- 松本文子・市田行信・吉川郷主・水野啓・小林慎太郎, 2005, 「アートプロジェクトを用いた地域づくり活動を通じたソーシャルキャピタルの形成」『環境情報科学論文集』19, 157-162.
- パトナム・D (坂本治也・山内富美訳 2004), 「ひとりでボウリングをする—アメリカにおけるソーシャル・キャピタルの減退」宮川公男・大守隆編『ソーシャル・キャピタル 現代経済社会のガバナンスの基礎』東洋経済新報社, 55-76 頁.
- 札幌市立大学地域創生デザイン研究チーム, 2020, 『地域創生デザイン論 “まち育て” に大学力をどう活かすか』文真堂.
- 澤村明編著, 2014, 『アートは地域を変えたか 越後妻有大地の芸術祭の十三年 2002-2012』慶應義塾大学出版会.
- シュワント T. (伊藤勇, 徳川直人, 内田健訳 2009) 『質的研究用語事典』北大路書房.
- 豊岡演劇祭実行委員会編, 2022, 『豊岡演劇祭 2022 公式ガイドブック』豊岡演劇祭実行委員会.
- 宇沢弘文・茂木愛一郎編, 1994, 『社会的共通資本 コモンズと都市』東京大学出版会.
- 山竹伸二「質的研究における現象学の可能性」小林隆児・西研編著, 竹田青嗣・山竹伸二・鯨岡峻『人間科学におけるエヴィデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ』新曜社, 第 2 章 61-117 頁.

Establishment of Cultural Social Capital in the Community :
Based on collaborative research relating to the art festival of “Kaze To Daichi 2021” by
ENIWA Studies of Hokkaido Bunkyo University and Shimamatsu Musōkan

KATO Hiroaki, NISHINO Miho, KASAMI Yasuhiro, YOSHIOKA Akiko and OYAMADA Ken

Abstract: In this paper, after hearing from Tsuruta and his colleagues, we clarify the meaning of the process of supporting the use of Musōkan. As a result, three points have become clear. First, the underpinning of the Tsuruta’s support and admiration for the performing arts that were shown in the theater of his beloved hometown. It relates to his learning of specialized stage technology. Second, there is a great deal of chivalry in his nature that has motivated his devotion to Musōkan users. Third, Tsuruta has exhibited tolerance and consideration that has been of considerable benefit to Musōkan users. In conclusion, the above three points have come to be appreciated and shared among colleagues of Musōkan and have assisted in the formation of cultural social capital.

Keyword: ENIWA Studies, Musōkan , Cultural Social Capital